



喪失の先の新たな一步



国 籍 インドネシア
職 種 パン製造
実習実施者 株式会社タカキ
ペーカリー
監 理 団 体 協同組合西海協

アネウ ムスティカ ラハユ
ANEU MUSTIKA RAHAYU

人生には誰にでも、最も辛い瞬間があります。私にとってそれは、父を失った時でした。

あの日の朝、すべてが変わりました。父が冷たく横たわっていたとき、私はそっと近づいてささやきました。

「心配しないで。私と母は、精一杯生きていくから。安心して旅立って。お父さん、あなたはずっと私の心の中で生き続けるよ。」その日を境に、私の人生には大きな穴が空いたように感じました。今まで頼りにしていた足元を失い、私の世界は崩れ落ちました。

父は長い間、肝臓の病気に苦しんでいました。いつも水をあまり飲まず、甘いお茶を好んで飲み、何かあれば漢方に頼っていました。当時の私は、その習慣の危険さに気づくことができませんでした。気づいたときには、父の体はすでに限界を迎えていました。

今でも後悔しています。もっと知識があつて、もっと力があつたら、父にできたことがあったかもしれない。しかし、どれだけ後悔しても、現実は変わりません。私はその現実を受け入れる強さを学ばなければなりません。

それから、私は看護師になりたいと強く思うようになりました。命を守り、苦しむ人に寄り

添える人になりたいと思いました。しかし、すぐには夢に届かず、家族の経済的な理由で、まずは働かなければなりませんでした。

そんなとき、私はこれまで考えたこともなかった道を選びました。それは日本へ行くことです。なぜ日本だったのか。私が高校生の頃、日本で働きたい学生を派遣する機関があることを知りました。そのとき父に「いつか日本に行ってみたい」と話したことがあったからです。あのときは冗談のような夢。でも今こそ、その夢をかなえたいと思いました。

日本に来るまでの道のりは決して平坦ではありませんでした。母を一人残すのはとてもつらかったです。しかし、母は私の未来のために、大きな心でその背中を押してくれました。技能実習生として選ばれるために、多くの試験や面接を乗り越える必要もありました。しかし私は心を決めて、一步一步進みました。これが自分の未来のための大きな一歩だと信じていたからです。

そして今、日本で実習をしながら、多くの人生の教訓を得ることができました。技術も、考え方も、自分自身も、大きく成長しました。文化や言語を学びながら、数え切れないほどの挑戦に向き合い、乗り越える力を培ってきました。私は少しずつ、喪失を受け入れ、新しい希望を持って前を向くことができるようになりました。喪失は私を強くし、「あきらめない心」を与えてくれたのです。

私は信じています。父は今、空の上から安心して私を見守ってくれていると。たとえ一緒にいられなくても、私は父と母と、私たちの未来のために、これからも歩き続けます。喪失は辛いものですが、その先には必ず自分を成長に導く新たな一步を届けてくれるに違いありません。